

幸田真音著「破綻は突然やってくる - 迫る日本の財政破局 - 」

日本の針路、読売新聞 2010年5月22日朝刊を読む

## 迫る財政破局

1. 日本では毎年、大量の国債が発行されてるのに、なぜ値段が下がらないのか。これだけ多くの国債を誰が、なぜ買っているのか。いつまで買い続けてもらえるのか。国民はもっと疑問を持ってほしい。
2. 10年前、日本国債の売買を行うディーラーたちが、所属する会社の垣根を越えて結託し、国債の「札割れ」を起こすという筋書きの小説「日本国債」を書いた。当時と比べ、国債市場の透明化などが格段に進んだことは評価できる。
3. しかし、本質的な財政問題は何も変わっていない。国債発行を抑える役割を果たすべき政治家が、「国民のため」と称して財政出動を繰り返し、危機を膨らませている。今年度は、税収よりも国債発行による借金の方が多くなった。こんな異常なことを続けられるはずがないのに危機感がない。国債は「打ち出の小づち」ではない。
4. もし、ギリシャのように国債の価値が暴落し、長期金利が急騰したらどうなるのか。次の日に死者が出たりするわけではない。「住宅ローンを抱えてないから関係ない」という人もいるかもしれない。だが、企業も銀行も家計も長年の低金利に慣れすぎ、長期金利が3%、4%と上がっていったときに対処できるのか。長期金利の上昇は、(金利の負担増など)企業の収支を直撃する。株価下落よりも怖い。
5. 破綻は突然やってくる。ギリシャや夕張市を教訓として、借金漬けの日本の財政を改善させなければならない。企業や国民が税金を支払う能力を高められるような政策に、お金を使うべきだ。
6. 幸いにも、日本は今、何かあったときに資金が逃げ込んでくる「逃避先」になっている。短期的とはいえ日本は信用され、日本円、日本国債が買われている。このアドバンテージがあるうちに、「財政規律は守る」「税制改革に取り組む」「国債市場の改革を進める」というメッセージを国内外に発信する必要がある。

## [コメント]

このまま放置すればいつの日か必ず突然やってくる破綻を前に何をしたらよいか。外資系銀行や証券会社で債権ディーラーをし、経済小説も執筆している幸田真音女史の意見に耳を傾けたい。経済小説「日本国債」「小説ヘッジファンド」はこの時代の日本人には必読。

- 2010年5月22日 林明夫記 -